

# 国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所  
〒259-1293 平塚市土屋 2946  
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス  
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

## 出会い、閃き、積み重ね

行川 一郎

今年4月から神奈川大学教員が学内で行なう共同研究に対する支援体制が強化・整備され、共同研究奨励制度が新スタートした。これは神奈川大学の教学改革の一翼を担うものである。文系・理系の別なく、申請された共同研究プロジェクトを統括的に審査して、社会的有用性と成果獲得の可能性が大きく見いだされる計画に研究支援のための資金助成を行っていく。共同研究計画の明確性、外部の研究プロジェクトとの重複申請、複数プロジェクトで活動する申請者の位置づけ、グループメンバーの人選、文系・理系を一括して扱うことの困難性等々、一般的な研究支援システムと同様の課題が本制度にも存在する。それらを超えて本制度が新たなスタートを切ったのは何よりも「本学を国際競争力のある個性輝く大学として発展させる」(神奈川大学共同研究奨励規程第1条より抜粋) ために他ならない。このように神奈川大学は共同研究に関して新たな認識に基づいた展開を進めている。国際経営研究所も大学内の他研究所同様に、精力的に共同研究を推進しているが、時代に先んじた国際経営に関わるプロジェクトの支援をどう強化していくかが課題である。

一方、私たち所員も研究については心しなければならぬ。概ね文系の研究者は個人研究を主たる範疇としている。しかし、研究の本質に書斎、野外、実験室、個人、共同の区別はない。成果の中身が重要なのである。2002年にノーベル化学賞を授賞した田中耕一氏は超人的なエネルギーで実験を繰り返す人だったという。その努力の積み重ねの中からノーベル賞授賞に結びつくことになる成果を生み

出した話はよく知られている。青色発光ダイオードを世に送り出した中村修二UCSB教授が研究に寄せる情熱も似ている。中村氏の日亜化学工業(株)勤務当時の仕事ぶりはいわゆるサラリーマン研究者とはかなり様相を異にしていたそうである。両者とも天才肌ではなく、とことん突き詰めていく **super smart** (秀才) ということができよう。この **smart** という語には利己的なニュアンスが含まれるとされている。揶揄的に用いられることがあるのもうなずける訳だが、それを承知した上で猶、私たちはまずは個々人の研究を **smart** に突き進めるべきだというのが私の持論である。

共同研究はいわばグループ作業であり、与えられた命題についてアウトプットを出す努力が求められる。研究者は共同研究、個人研究を超えて独自の存在であるべきであり、そのためにもやはり深淵な研究テーマを掲げるべきであろう。他人に言ってもわからない、そんなスゴいユニークなテーマとの「出会い」こそが研究者にとってなりよりも大切である。次に必要なのが「閃き」である。人並みなアプローチでは世俗的な研究結果しか出し得ない。「閃き」には人知をこえたものがあるかも知れないが、それを支えるのが弛まぬ「積み重ね」であろう。「出会い、閃き、積み重ね」それが個々人の研究を方向付ける基盤であり常々、自戒するところでもある。

実は、この「出会い、閃き、積み重ね」は人生全般に通じる一面の真理かも知れない。十余年前にふとした機会に出会った在米の語学学校長が、引退挨拶に知人を連れて先日訪ねてきた。積み重ねは人との交流を花開かせるといふ大切な真理を実感したばかりである。

(経営学部長/なめかわ・いちろう)

## 一枚岩のこと

大橋 哲

数日前に、研究のこぼれ話を紹介せよとの依頼を受けました。未熟でこぼれる程のものはありませんが、ここでは私のちょっとした言葉使いの調べ方についてお話させていただきます。言葉の意味には「直感」に属する部分があります。雪国生まれの私は、島村の見たおりの車窓の風景が、私の目にも映っていると確信し、トンネルを抜けると夜の底が白くなったことを体感したような気になります。言葉に対する直感とはしかし、いかなることなのでしょう。感傷や独りよがりと同等に、直感というものを排除することは可能なのでしょう。外国語教育界では、ネイティブスピーカーの直感が長く神聖視されて来ました。変形文法では、直感が理論体系の中核として位置付けられています。そこでいう直感とは、文構造の正誤判断の基準のようなものですが、非ネイティブスピーカーには、この直感が備わっていないこととなります。外国語に関する研究発表などでは、「この例文は全てネイティブチェックを行ってあります。」といったコメントが付くことがよくあります。

直感の欠落した語学学習者である私は、それを少しでも補う手段として、最近ではネイティブチェックの代わりに、コーパスを利用することが多くなりました。コーパスとは、様々な分野での膨大な言語使用例をデータ化したものであり、有名なものとしては、イギリスパーミンガム大学が作成した数百万語に及ぶ **The Bank of English** などの言語データがあります。コーパスは、例えば翻訳を試みるような場合や、ある単語が使われる文脈が知りたいような場合に、従来の辞書では考えられなかったような威力を発揮します。そして、それはネイティブスピーカーといえども、一個人の「直感」で説明しきれないと思われない量の情報を与えてくれます。

「学部教職員が一枚岩になって2007年問題に対処せねばならない。」例えば、この種の文の英訳を考える場合、語学学習者として

は、**monolith/monolithic** などの単語が思い浮かぶのではないのでしょうか。日本語を母語とする者にとって、一枚岩は結びつきのしっかりした組織の象徴であり、その肯定的な意味合いを切り離すことは出来ないものようです。私の手元に日本語のコーパスがありませんので、インターネットの検索でその使用例を見てみると、次のような例が数多く見つかります。「中沢復帰で **DF** 陣一枚岩 / 指揮官との一枚岩強調 / 牛肉輸入:米国は一枚岩ではない / 家族は一枚岩であるべきだ / 経営は、一枚岩になっているか」いずれも、一枚岩のもつ肯定的な意味を前提とした使用例です。このような肯定的意味合いを、日本語の母国語話者としては、自然に英単語の **monolith/ monolithic** にも当てはめてしまいがちです。

## 研究余滴

この単語は危ないといった「学習者としての直感」が必要ではありますが、そのような場合にコーパスは有用です。検索ソフト

を用いて、先ほどのインターネットを用いた用例探しを、より体系的、且つ瞬時に行うことが可能です。例えば、**monolithic** という単語が、ある英字新聞で一年間に用いられた全用例を、瞬時にコンコダンスラインと呼ばれるリストとして並べることが出来ます。その前後に用いられる単語やその語を含む文脈などが簡単に検索できるわけです。紙面の都合上、それを紹介することは出来ませんが、最初の数例のみ以下に示します。

Now the **monolithic** 50-story structure looked like a dark, abandoned .../...the **monolithic** 'all things to all people' approach evaporates / ...skiers are still keen on the high, convenient and big, but not on the **monolithic** and soulless. / Not everyone is happy with this expensive, **monolithic** approach to the study of unpredictable environmental changes. 直ぐに気が付く点は、どの例文でも **monolithic** という単語が、画一的で変化に乏しいといっ

た否定的な意味合いで用いられている点です。

この種の意味を、言語学では **Connotation** (内包・暗示的意味) と呼びますが、翻訳の場合などには、特に注意を要する部分です。これは、いわゆる直感に属する部分である場合が多く、ネイティブスピーカーといえども、その単語の使用される文脈とともに内包を説明することは至難の業です。特に、それが多義の単語であることを知っていても、それぞれの意味が用いられる頻度を知ることは、コーパスを用いなければ不可能です。

このように危険な単語は数多くある筈であり、外交摩擦に広がる危険性さえもはらんでいることがあります。学部教育を一枚岩でという文を **monolith** で表わせば、日本文化特有の奇妙な対応であろうといった誤解を生じるか、不可解な文になってしまう可能性が高いと思われます。「牛肉輸入:米国は一枚岩ではない」という前述の例は、アメリカ人外交官とのインタビューの内容を報道した記事に用いられたものですが、その外交官が実際に **monolith** という言葉を用いたのであれば、米国の状況に応じた適応力の高さを主張してい

た可能性が有ります。日本人読者の多くは、米国側のコンセンサスの欠如を認めているかのような発言として受け取るのではないのでしょうか。或いは、日本人の記者の書き加えたコメントとして一枚岩という言葉が使われたのであれば、多くの日本人にとって、それは米国を批判するものと理解されるかもしれません。そして、このコメントが **monolith** という英単語で訳されるとすれば、アメリカ人にとっては、日本側からの不可解なお世辞のように聞こえるかもしれません。

言語に対する直観とは、どのようなものなのか私には未だ良く分からないのですが、少なくとも言語使用者個人で完結したものではなく、その言葉について社会的に共有された文脈を、どの程度正確に瞬時に把握できるかという点が、深く関わっていることは間違いないと思います。窓の外に雪の積もる音が聞こえるほどの静寂に包まれた雪国で育った者ゆえに、説明できないほどの文化的な内包を、川端の文章に読み込んでしまうのでしょうか。

(所員/おおはし・さとし)

## 堀江要蔵氏が公開講演

国際経営研究所では、去る6月30日(木)に前期第1回の公開講演会(経営・会計分野)を開催しました。講師には、横浜信用金庫顧客相談室の主任専門役で中小企業診断士の堀江要蔵氏をお迎えし、経営学部の学生・大学院生を中心に約300名の聴講生が会場の67-302教室に参集しました。

堀江氏の講演は、「現代企業の組織再編戦略—ライブドアのM&A戦略に学ぶ—」と題し、2年次の会計学原理や簿記原理などの時間帯を使って90分行なわれました。講演の主な項目は、次のとおりです。

- ① 経営戦略の意義と効果
- ② 事業組織再編とM&A
- ③ ライブドアのニッポン放送株取得
- ④ フジテレビの企業防衛策

## ⑤ 証券市場の評価と対応

堀江氏は、まず、特に中小企業における経営戦略の意義とその有効な方策としてのM&A戦略の仕組みについて明らかにしました。その上で、最近注目を集めたライブドアによるニッポン放送株取得およびフジテレビとの業務提携の一連の取り組みについて、事実関係の経過とその効果、および問題点と今後の課題を詳細に説明されました。満席の会場では学生諸君が熱心に聴講し、テイク・ノートに余念がなかったように思います。

### 経営学部インターゼミナール大会の開催

国際経営研究所では、神奈川大学経営学部各ゼミナールの研究活動の発表と学生間の相互啓発を目的として、「神奈川大学経営学部インターゼミナール大会」(略称インゼミ)を開催することになりました。ゼミナール単位で参加し、研究発表、新規事業計画発表を行なうものです。開催の概要は次のとおりです。各部門に積極的な参加を期待します。

実施日時 2005年11月16日(水)  
13:30~18:00  
(終了後、厚生棟にて講評表彰式、懇親会を行います)

実施講堂 61号館249、250、251講堂  
研究発表

#### ①学術研究部門

経営分科会—経営理論の研究や優れた経営戦略を実行している企業事例の研究調査発表。

会計分科会—会計理論や最新の会計動向に関する研究発表。

国際分科会—地域研究や文化社会に関する研究発表。

#### ②新規事業計画部門

これまでにない起業アイディアを、新規事業計画として発表。

### 『国際経営フォーラム』第16号の発行

去る6月1日に『国際経営フォーラム』第16号が発行され、学内外の関係者に送付されました。本号は、<価値創造のマネジメント>を特集に組み、本年2月に開催されたフォーラムの概要を誌上載録してあります。掲載の論文は、所員の研究論文のほか、共同研究、公開講演、研究・教育ノートなど多彩な内容となっています。また、当研究所の元所員で、現在法政大学教授の桐村晋次先生より玉稿を特別寄稿して頂きました。本号は、基本的には2004年度の当研究所並びに所員の研究・教育活動に係る成果を取りまとめたものです。読者の皆さんの建設的なご提言や忌憚のないご批判を賜りたいと願っております。

神奈川大学エクステンション講座

神奈川大学広報事業課(みなとみらいエクステンションセンター)が推進する生涯学習・エクステンション講座の2005年度前期の講座がほぼ終了しました。

国際経営研究所では、同事業課よりの要請に応じて、前期に2つの講座を開設することでその態勢を整えてきました。開設された講座の1つは、「中小企業の経営革新—価値創造のマネジメント—」を統一テーマとするものです。5月18日から毎週水曜日の午後7時からの2時間、横浜市みなとみらいのKUポートスクエアにおいて、6名の講師と各テーマによる6回連続の講座として運営されました。

講師陣は、土屋守章、関町肇、諏訪部栄亮、小沢裕司、後藤伸および照屋行雄の各氏です。受講者は13名と少なかったが、企業経営者や管理者、コンサルタントを目指す人など意欲の高い社会人が多く、実践ゼミナールの講座として大きな成果があったように思います。

企画された他の講座は、魅力的なテーマと講師陣であったものの、受講生が少ないなどのために実現されませんでした。講師予定の先生方には誠に申し訳なく、お詫び申し上げる次第です。

しかし、これについては、神奈川県教育委員会の「生涯学習プログラム講座」(2005年10月12日~11月16日、於—KUポートスクエア)として、7回連続の市民講座が開設されることになりました。統一テーマは「日本の国際貢献—国際社会の変化と日本の役割—」で、講師陣は、石積勝、田畑光永、田中則仁、ティオフィラス・アサモアおよび今田克司の各氏です。

なお、本年度後期のエクステンション講座には、当研究所として次の2つのビジネス系講座を開設することで企画を進めています。

- ①「経済記事の読み方・会社情報の見方」(仮)(10/13~11/24、菅原晴之氏ほか)
- ②「ラテンアメリカ美術サロン／魔術を操る女性美術作家たち」(10/14~11/25、加藤薫氏ほか)